

# 伊丹福音ルーテル教会 降誕節第一主日礼拝のしおり

## 2021年12月26日

### 前奏

#### 招きのことば：詩編 22 編 23-27 節

主わたしは兄弟たちに御名を語り伝え 集会の中であなたを賛美します。  
主を畏れる人々よ、主を賛美せよ。ヤコブの子孫は皆、主に栄光を帰せよ。  
イスラエルの子孫は皆、主を恐れよ。  
主は貧しい人の苦しみを 決して侮らず、さげすまれません。  
御顔を隠すことなく 助けを求める叫びを聞いてくださいます。  
それゆえ、わたしは大いなる集会で あなたに賛美をささげ 神を畏れる人々の前で満願の献  
げ物をささげます。  
貧しい人は食べて満ち足り 主を尋ね求める人は主を賛美します。いつまでも健やかな命が与  
えられますように。

#### 罪の悔い改めと赦しのことば

**会衆：** 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。

私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

**牧師：** 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

#### 使徒信条

**われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。**

**われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。**

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

**我は聖霊を信ず**、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、かぎりなきいのちを信ず。 **アーメン**。

### 祈り

愛とあわれみに満ちておられる 私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。あなたは私たちの本年の歩みを導いてくださいました。また、今朝も共に礼拝にあずかって、罪の赦しをいただき、新しいいのちをいただきます。クリスマスにお生まれくださったイエス様が、新しい年も私たちの生活のただ中にお住いくださって、私たちの新しい年の歩みをも導いてください。礼拝で神様の愛と恵みに満たされ、家庭、社会で豊かに実を結ぶ年となりますように。

新型コロナ・ウィルスの感染拡大を防ぐために、なお緊張感を保っていかなければなりません。その中でも 御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして 安心して 生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり 主である イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

### 使徒書朗読：コロサイ 3章 12-17節

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

### 福音書朗読：ルカによる福音書 2章 41-52節

イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しか

し、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。

### 讚美歌 114 番

1. 天なる神には 御栄(みさか)えあれ 地に住む人には 安きあれと  
御使いこぞりて ほむる歌は 静かに更けゆく 世に響けり
2. 今なお御使い 翼を伸べ 疲れしこの世を 覆い守り  
悲しむ都に 悩む鄙(ひな)に 慰め与うる 歌をうたう
3. 重荷を負いつつ 世の旅路に 悩める人々 頭(かしら)を上げ  
栄(は)えあるこの日を たたえ歌う 楽しき歌声 聞きて憩え
4. 御使いの歌う 安き来たり 久しく聖徒の 待ちし国に  
主イエスを平和の 君とあがめ あまねく世の民 高く歌わん アーメン

### 説教：「父の家にいる」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

イエス・キリストがお生まれになったことを祝うクリスマスの次の主日礼拝は、どのように神様であり人であるイエス様がお育ちになったのか、という家庭生活に焦点が当てられます。今日読まれた箇所は、イエス様が人として大人になっていくプロセスの一コマです。イエス様は、母マリヤと、育ての父ヨセフの長男としてナザレと言う小さな村で育ち、しばらくは家具職人というような大工であったヨセフを助けて働いたと思われます。当時イスラエルでは13歳で成人式を迎えました。イエス様が12歳になったとき、両親に連れられ、歩いて4日ほどかかる都エルサレムに「過ぎ越しの祭り」に村の人たちと一緒に出かけました。過ぎ越しの祭りは春分の日の後に行なわれる春のお祭りで、イスラエルの人々が昔、神様によって奴隷の国エジプトから導き出されたことを忘れずに感謝して祝う大切なお祭りでした。みんな家族連れでエルサレムの神殿を訪れ、家族で過ぎ越しの夕食を食べるという習慣が定着していました。

旅は男性と女性が別々にかたまって歩きました。ナザレへ帰るとき、ヨセフはまだ成人していないイエス様はお母さんと一緒にいると思い、マリヤは来年成人なのでお父さんと一緒にいるのかなと思っていたのでしょうか。一日の旅路がおわってイエス様がいなくことに気付きました。それで二人は引き返し、道々尋ねながらついにエルサレムについたときはもう三日が経っていました。

イエス様を見つけました。エルサレムの神殿の境内で、律法学者たちに囲まれて聖書のお話をしていました。その姿を見てふたりは驚きました。お母さんが言いました。「どうしてこんなことをしたの、ほら、お父さんもわたしも心配したのよ、捜しまわったじゃないの。」もちろんヨセフもマリヤもイエス様が神の御子救い主であり、人となって生まれて育ってきたことを大前提として知っていました。けれども神様から預かった大切な息子を自分たちは見失ってしまったという気持ちがこのようなことばを生んだのでしょう。

イエス様はそろそろ大人の仲間入りをする年齢になっていたのです。イエス様はふたりに答えました。なぜ捜したのですか、わたしは当然父のところにいることをご存じなかったですか、と言われました。両親はそのときは意味がわからず、イエス様を連れてナザレに帰ったようです。そこでイエス様は両親にお仕えになって育ちました。聖書には、イエス様は知恵が増し、背丈も伸び、神と人に愛された、とあります。イエス様はそこで両親に仕えて30歳まで暮らしました。

ここでまず第一にわかることは、イエス様が救い主としての自覚をもってお育ちになっていることです。つまり、人生半ばまで人として育ち、おとなになったある日に神様の知らせを受けて、実は自分は救い主だったのだ、と急に使命感に燃えて人々に教え始められた、というのではありません。また、12歳のイエス様は、人として成長しておられます。まことの神様でしたので罪は犯されませんでした。まことの人として成長なさっています。

母マリヤは、イエス様をおなかに宿す前に天使ガブリエルに言われた通り、この子は神様からダビデの王座をいただく救い主であると意識していました。イエス様もご自分が救い主である自覚をお持ちでした。大人になっていく中で父なる神様を慕う姿が見えます。マリヤは、あなたのお父さんのヨセフとわたしマリヤは心配したのよ、と言いましたが、それにこたえてイエス様は、神様のことを「わたしの父」と呼びました。そして、ご自分が父のところにいることがご自分にとって当たり前であることをわきまえておられました。

イエス様にとって大人になる、ということは、父なる神様のところにいることを当たり前のこととする神様の子どもとしての自覚が進むことでした。大人も子どもも人としての価値はかわりません。そして、人は成長するにつれ背丈が伸び、知恵が進みます。イエス様にとって、大人になって自立することは、これまで衣食住のお世話をし、知情意の育成に心を配ってくれたお父さんお母さんにいろいろな面で依存することから、感謝をもって尊重し、助けていくことに移っていくことでした。そして、父なる神様のところに心を置き、私の父、と呼んで恐れ、愛し、信頼することでした。

あなたはいかがでしょう。この一年で人として、また神様の子どもとして、成長されましたか。神を恐れる、神を愛する、神に信頼することにおいて成長されたでしょうか。神様に信頼し、神様が出会わせてくださった方々を大切にすることにおいて成長されたでしょうか。

私たちは人の評価によって生きもし死にもする、そんな社会に生きています。人から尊重されることがないと生きて行けそうにありません。そこで神様から目が離れ、本当は頼りにならないものを頼りにしてしまうことがあります。私たちみんなに承認されたいという欲求があります。人から認められたい、という願いです。人から「いいね！」と認められたい気持ちです。このような気持ちを満たそうとしてそうとう無理をしたり見栄をはったりすることがあります。そして一時的にでも満足いく結果を得ると優越感にひたります。けれども人に認められるほどの者ではないとわかると、人を妬んだり、劣等感に苦しめられたりするものです。神様から目が離れると、頼りにならないものを土台にして歩まなければなりません。それはある意味で人に依存していることです。人に甘えているのです。私たちは一生にわたって一定しない人の思いにたやすく振り回されます。欲求不満で喜びが失われます。優越感や思い上がりは自分は気持ちがいいのですが周りの人を傷つけます。

また私たちは試練にあうと、つい神様以外の頼りにならないものを頼りにしてしまいます。いつも将来のために用意できているだろうか、と心配します。自分を土台から支えてくれるしっかりしたものなど、人生にはないのではないのか、だから幸運な人はよいが自分のような者は不運にも苦しみを耐え続け、色々なことを諦めなければならぬのだ、とはかなんでしまいます。

イエス様に目をとめましょう。わたしが父なる神様のおられるところにいるのは当然です、と言われました。イエス様はこのような心をあなたにも与えてくださいます。自分では、つい人に甘えてしまいます。神様から目が離れます。しかしイエス様はあなたのその罪を赦して、あなたの本当のお父様である神様に信頼して生きる信仰を与えてくださいます。

信仰をもって聖書のみ言葉の語られるところを自分の居場所とするなら、聖書には神様があなたを大切にしてくださっている約束で満ちていることにあらためて驚かされます。ローマ人への手紙 8 章 31 節には神様はあなたの味方です、神様は私たちすべてのためにご自分の独り子さえ惜みず死に渡されました、イエス様はあなたの罪を赦すために死んでくださり、あなたを守り導くために復活してくださいました、と約束されています。38 節からにはこう記されています。「わたしは確信しています、死も、命も、天使も、支配する者も、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことはできないのです。」神様はこのような確信を私たちの心につくってくださいます。

ではいかがでしょうか。人を恐れず、人と比べずに歩むというと、ひとりであること、誰とも交わりをしないで自分のなかにこもって歩むことになるでしょうか。傷つく機会が少なくなる無難な生き方かもしれません。いや、自分の好きなこと、自分の深い心の願いに気が付いて、誰にも邪魔されず、また誰の邪魔もしないで、自分で喜びと満足を味わって歩む人生は、もしかすると現代人のあこがれの生き方なのかもしれません。

しかしイエス様の歩みに目をとめましょう。イエス様は、エルサレムの神殿の境内にとどまったのではなく、ヨセフとマリヤに従ってナザレに帰りました。そこで両親に仕えてお暮しになった、と書いてありましたね。父なる神様に信頼をしているイエス様は、父なる神様が与えてくださった両親を敬い感謝し、両親を助けて歩みました。イエス様は、知恵が増し、背丈も伸びた、と書いてありますね。そのために様々な技術も身に付け、能力を開発して、そのようにして知力も体力も育っていきました。母マリヤはこれらのことを心に納めて、自分の母としての本来の使命が何であったのかを見つめました。

私たちは神様が出会わせてくださった人々と比べることなく、人々を恐れず、むしろ受け入れ、大切に、自分の役割を通してもっと人の役に立つことができるように自分を鍛え自分を高め、ともに幸せをつくっていくのです。イエス様は神様と人々に愛された、と書かれていますね。これは人として最高の姿ではないでしょうか。

神様に信頼する人は、なんでも神様任せにして日々を消化していくような人、うわべだけの喜びでろくな努力もせず、ぬけがらのようなつまらない怠慢な人なのではありません。むしろ、自分の虚栄心を満足させるため、というこれまでの自己中心でわがままな、本当は何の意味もないつまらない目的に幻惑されていたことから解放されて、すでに父なる神様の変わることはない愛と信頼をいただいているので、人の評価や人の目によって正しさをごまかしたり曲げたりすることなく、お腹の底から力を振り絞り、心おきなく隣人のために精一杯自分を鍛えて、隣人とともに幸せをつくっていくために渾身の力を尽くして全身で取り組む尊い汗をかく、本当の生きがいに恵まれた生き方です。そして人々にも愛される生き方です。イエス様がわたしの罪を赦して下さって、新しいいのちをつくってくださる、そんなイエス様を父なる神様は私のためにお与えくださった。そのように神様に愛されている人は、また、隣人を大切に、共に幸せを作っていくので、人にも愛されます。

どうでしょうか。今日はクリスマスにお生れになったイエス様が、どのようにお育ちになったかに注目する主日です。わたしはわたしの父のいるところにいることが当然です、と言われたイエス様のような信仰が私たちにも与えられます。家庭の中で親がこの信仰に生きると、子どもたちは自立するときに神と人に愛されます。子どもがこの信仰に生きると親は自分の本来の使命に目覚めます。夫がこの信仰に生きると、また、妻がこの信仰に生きると、家庭全体が神様の愛に生まれ、互いには甘えるのではなく大切にしたい高めあって、それぞれの持ち場で生きがいをもって歩む家庭となります。神様のみ言葉にあずかる教会を大切に、社会で明るく自分の力を尽くす家庭となります。新しい一年を、新しい思いで迎えましょう。

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人々に愛された。」ルカ 2:52

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン

### 讚美歌 121 番 献金 献金感謝の祈り

1. まぶねのなかに うぶごえあげ 木工(たくみ)の家に人となりて  
貧しきうれい 生くるなやみ つぶさになめし この人を見よ
2. 食するひまも うちわすれて しいたげられし ひとをたずね  
友なきものの 友となりて 心くだきし この人を見よ
3. すべてのものを 与えしすえ 死のほかなにも 報いられて  
十字架のうえに あげられつつ 敵を赦しし この人を見よ
4. この人を見よ この人にぞ こよなき愛は あらわれたる  
この人を見よ この人こそ 人となりたる 活ける神なれ **アーメン**

### 主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。  
みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。  
われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。  
われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。  
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

### 頌栄：讚美歌 541 番

父、御子、御霊の おおみ神に ときわに たえせず み栄えあれ、み栄えあれ **アーメン**

### 祝福の言葉

仰ぎこいぬがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき  
お交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、  
豊かにありますように。 **アーメン**

### 後奏